

全体で A4 用紙 10 枚以内に納めてください。スペースは自由に動かして構いませんが、字数制限がある箇所は制限以内で記載してください。

チーム名・代表者氏名	N&M 西住剛								
発表テーマ (50字以内)	5万人がみんな顔見知り ～人を、時間を、場所を、人生を、足りないものをシェアしあう まちづくり～								
提案概要を 400 字以内でまとめて記述してください。									
<p>「少子高齢化」という言葉を定義する際に、一見その最たる原因であるかのように扱われる高齢者を、廃校になった小学校や地区の公民館など、みんなが集える公共の場所で、子育ての担い手として活躍してもらうことで、小さな子どもを持つ若い夫婦も、もっと地域に甘えてもいいんだ、まるで家族のようなご近所付き合いだと思えるような、ちょっとだけ昔の日本が持っていた地縁の「みんな顔見知り」を再生する。</p> <p>そのために、農業を田舎でやってみたいが経験はないという就農希望の若者と、後継者不足に悩む農家を受け入れ先としてリンクさせることにより、農業の経験・知識を継承するとともに、家族ぐるみでお世話になることを想定した就農移住の仕組みづくりを行う。</p> <p>これにより、高齢者の生きがいづくり・転入者の増・子育て支援の充実を目指し、菊池市においてよという意味を熊本弁で表した「ヒヤーンナッセキクチ」計画を提案する。</p>									
提言の内容									
この提言で解決しようとしている問題・課題とその背景および、提言の目的を明確に記述してください。									
<p>全国規模で減り続ける人口、少子高齢化、食べていくために働き、忙しく過ぎ去っていく日常、希薄化する人間関係、私たちを取り巻く環境はそんな嫌な言葉で溢れかえっている。</p> <p>統計上による少子高齢化の点において、菊池市では、合計特殊出生率は県平均とほぼ変わらない 1.62 前後で推移しているものの、65 歳以上の割合、いわゆる高齢化率は 29.1%と、県の 27.1%、全国平均の 25.1%を上回っている。</p>									
<div style="text-align: center;"> <h3>高齢化率(65歳以上)</h3> <table border="1"> <caption>高齢化率(65歳以上)の比較</caption> <thead> <tr> <th>地域</th> <th>高齢化率(65歳以上)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>菊池市</td> <td>29.1%</td> </tr> <tr> <td>熊本県</td> <td>27.1%</td> </tr> <tr> <td>全国</td> <td>25.1%</td> </tr> </tbody> </table> </div>		地域	高齢化率(65歳以上)	菊池市	29.1%	熊本県	27.1%	全国	25.1%
地域	高齢化率(65歳以上)								
菊池市	29.1%								
熊本県	27.1%								
全国	25.1%								

本市においても高齢者が若者と接する機会が無くなり、高齢者は高齢者としてしか関わりがない孤立化が起きている状況である。

また、各種産業における担い手不足の問題は深刻であり、菊池市が持つすばらしい水・緑に代表される自然、米をはじめとする農業を保つ上でも重要である。

農業についても同じことがいえ、現在は耕作放棄地が、熊本県平均で12.5%のところを菊池市は5.53%と県平均より低い水準で推移しているものの、高齢化が県の平均よりも進んでいることを考慮すると、耕作放棄地が県平均を超えることは、近い将来必ず訪れる問題である。

少ない生産人口で多くの高齢者を支える社会構造は、私たち行政のみならず、このまちに住むすべての人に暗いイメージしかもたらさず、菊池市の将来を悲観せずにはいられなくさせる。

「足りないモノ・欲しいモノが多すぎる」

しかし、少子高齢化の問題にしても、高齢者の数が多いことが問題ではなく、いびつな年代別人口構成がもたらしめている問題であり、本当に私たち日本人が怖がっているのは、人口が減ることにより、一度手にした数量的な「モノ」の繁栄を失ってしまうのではないかという不安である。

しかし、私たちのチームは、私たちのまち菊池市が探している「モノ」は、物質的・商業的な「物」のことだけではなく、「心の充足」と呼ぶべき癒しを与えてくれる「モノ」であるという考えを持っている。

東日本大震災を経験した私たち日本人は、このことに心のどこかで薄々気が付いている。

癒しを与えてくれる「モノ」を取り戻すための提案として、私たちのチームは、三世代同居が持っていた**血縁**による家族の力は難しいかもしれないが、その代わりに、血はつながらずともご近所さん同士が助け合う**地縁**の力により再生することで解決しようと考えた。

そこで注目すべきは、今現在都会に住んでいる人の中に、田舎で農業をして生活をしたいと考えているが農業のノウハウがなく、現在の都会の仕事を辞めてまで田舎に家族で移り住む一歩が踏み出せない人がおり、かつ田舎では後継者がおらず、今後の田畑のことを悩んでおられる人がいるという不遇なミスマッチが存在するという状況である。

現在熊本県の事業として、新規農業就労希望者への勉強会が開催されており、菊池市でも、新規農業就労者が農業を始めるときに、30万円(1回)かつ、5年間150万円(各年)を支給するという補助金の支援を行っている。

しかし、今の支援方法では一人で農業を始めた後、「周りに知り合いがいない、頼れるのは行政のみ」という状況を生み出しており、教をを請いながら長期的に農業を続けていくことは難しい状況にある。

ノウハウを教えるのは、行政ではなく後継者不足に悩む高齢者ではどうだろうか、新規就労者

とノウハウを教える高齢者の間に信頼関係が生まれ、独立した後も相談しやすい相手として残るだけでなく地域住民との人間関係を作る上でも大いに力になってくれるであろう。

しかし、仕事面の関係だけで、継続性が担保されるのかといえばそうではない。

新規就労として田舎で農業をすることを望んで移住してこられる人は、家庭を持っていることも少なくなく、母子がこの移住先で子育ての不安等から、今後の生活が不安であると感じてしまうとせっかく農業での生活を求めて移住された夫も都会での生活に戻らざると得ない状況になるであろう。

以上をふまえ、双方をうまくリンクさせることで、移住を希望される家族全員が子育て・仕事、両面に関して安心して移住することはできないか考え、地縁の力を取り戻すため、その触媒・火付け役であり、かつ「心の充足」を必要としているよそ者・若者を菊池市に惹きつけ、一度は失われた地縁の「みんな顔見知り」を再生することで、癒し、癒されるまちを創造することを目的とする。

提言の具体的な内容を記述してください。「誰が」、「何を」、「どのように」、「どのくらいの期間をかけて」を明確に、さらに、「いくらぐらいの予算をかけて」するのかについても言及があるとなお良いです。

まずは地元に精通している行政が、趣旨に賛同してくれ、かつ移住者を受け入れていただける農家・商工業者をデータバンク化することで受入れ先を確保し、移住者の先駆けである**地域おこし協力隊**の職員が都市部で菊池市をPRし、移住希望者を募る。

<データバンク化イメージ>



- 名前： 菊池 太郎（75歳）
- 家族構成： 妻（73歳）
- 作物： 米、ゴボウ、麦、野菜
- 人材を求める理由： 高齢になり以前まで栽培していた畑が余っているから
- 求める人材の条件： やる気のある方であればどなたでも！
- PR： 私の作物は無農薬で、まうごつ、うまかばい！
農業のノウハウを一から教えるけん一緒に頑張ろう！

少しずつ受入れの実績ができた2年後を目途に、新規の受け入れ先をバンク化する役割を、受入れ先及び移住者の両者の気持ちに精通した地域おこし協力隊 OB に、行政が有償で業務委託することで、受入れのミスマッチの発生率を可能な限り回避する。

必要な経費については、協力隊の人数にもよるが、協力隊1人につき年200万円の人件費のみで可能であると思われる。

高齢者の持つノウハウを移住者に提供しながら、お互いの交流を深め、家族ぐるみのお付き合いを通じ、信頼関係を築いていく。

また、馴染みの少ない土地で子育てをしていく移住者にとっては、子育てが孤立化し、不安感や負担感を招きやすい。

そこで、元気な高齢者を活用し、市内の公民館や廃校した小学校跡地において、あらかじめ登録した有償の「子育て支援隊」が次のような支援を行う。

- 用事があるとき親に代わって子守り、遊び相手
- 買い物時の付添い、買い物時の預かり
- 保育園への送迎
- 学童のお迎えや帰宅後のお世話
- おかずの提供(有料 1人分 100円位で)



親に代わって子守り



子育ての相談、遊び相手

移住者は、子育てが孤立化し、不安感や負担感を招きやすい。

そこで、地域の高齢者が公民館等の身近な所で、子守りや遊びを通じて、子供同士の交流を図ったり、子育ての悩みや不安の相談相手になるなどの支援を担っていく。

支援の内容は、移住者の働き方や子育ての状況などのニーズに合わせて、保育園の送迎や学童の放課後の世話など多様に対応できることとする。

さらに、お迎え時に、地元の新鮮な食材を使った夕食のおかずなどを数種類ずつ少額かつ有料で持ち帰れるような取組みも進める。

子育て支援隊は、市が開催する「子育て支援隊養成講座」を受講し、登録する。

○子育て支援隊

〈利用できる時間・料金〉

月～金の午前7時～午後8時まで⇒ 1時間 500円(うち半額を市が助成)

上記以外(夜間・早朝・土日祝等)⇒ 1時間 600円(同上)

備考 ※二人目以降は全額、市の助成

高齢者は、上記により報酬を得、また、利用者はその半額を負担する。

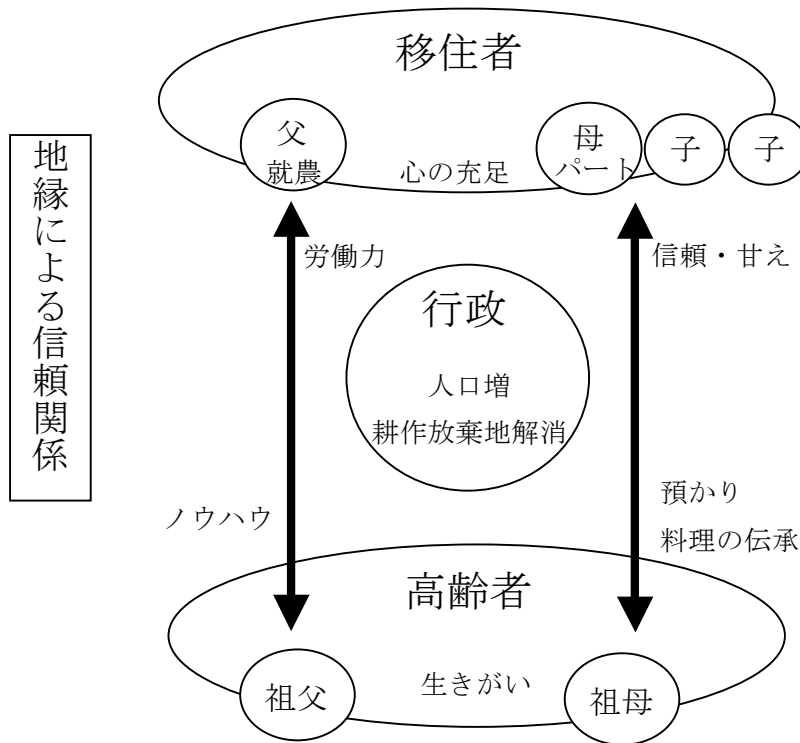
家族と地域における子育てに関する意識調査について:(内閣府)

〈地域における子育て支援の意識について〉

子育てをする人にとっての地域の支えの重要性を聞いたところ、約9割が、「とても重要だと思う」「やや重要だと思う」と回答している。

提言を実装したときに、期待できる効果はどのようなものですか。

私たちのチームが目指した、「**ヒヤーンナッセキクチ計画**」を実施することにより、基本コンセプトである、ちょっとだけ昔の日本が持っていた地縁による「**顔見知り**」が創出され、「行政」・「移住者」・「高齢者」をリンクすることができる。



「**行政**」からすれば、少子高齢化に悩んでいたが、都会からの就農移住者を受け入れることで、働き盛りの若者及び子どもの人口を増やすことができ、また、後継者不足に悩む農家の問題の解決、生産性の向上に努めることができ、かつ、有り余るエネルギーをぶつけるところがなかった元気な高齢者の生きがいづくり、非常に貴重で失われてしまうはずであった農業のノウハウの継承を促すことができる。

また、田舎で農業をやってみたいと思っている子育て世代の「**移住者**」からすれば、農業の経験の無い状態からでも受け入れ先にベテランの農業者がいることにより、安心して農業に取り組み、移住の決心がつくとともに、都会の満員電車の中では味わえなかった心の満足感が得られ、さらには、血はつながらないものの、心から安心してわが子を預けることができる、地縁により信頼できる家族、まるで自分の本当のお父さんお母さんを移住先の土地で手に入れることができる。

後継者を探している農家などの「**高齢者**」の立場からすれば、後継者さえいれば、作付面積をまだまだ増やしたいのに労働力が足りないがゆえに断念していた田畑を増やすことができ、このまま埋もれていくかもしれなかった農業のノウハウを後世に伝えることができる。

また、自分の本当の子ども・孫以外に、都会から移住してきて苦楽をともにした子ども・孫が地縁により、増えることとなる。

さらに、このヒヤーンナッセキクチ計画には、都会と田舎をつなぐ**新たなビジネスモデル**としての側面も持っており、それが移住希望者と受け入れ先の農家をマッチングする、地域おこし協力隊の役割である。

移住の先駆者である彼らは、都会から田舎に移り住んだ者の気持ちを誰よりも理解するとともに、受け入れ先である地元住民の気持ちも理解する唯一無二の存在である。

そんな彼ら地域おこし協力隊又は地域おこし協力隊OBの彼らに、移住者と受け入れ先のマッチング業務を行政から業務委託することにより、「こんなまちに来るんじゃなかった」又は「こんな都会の若いものを受け入れるんじゃなかった」というような、ミスマッチの発生率を可能な限り最小に抑えることができる。

また、地域おこし協力隊としての業務を終了した後、他の先進事例にありがちな、そのままこのまちで生活をしていく理由・手段・方法を失いがちな彼らに、このまちで生活をしていくための生業を、彼らの得意分野や経験則を活かした方法で、行政から提供することができる。

このように、「行政」・「移住者」・「高齢者」の三者が、相互利益を相乗効果的に生み出すことができ、**WINWIN**の関係を創出し、かつ新規ビジネスモデルを創出することで、だれも損をしない、むしろ心の豊かさを取り戻せる社会、本当にほしかった「モノ」を手に入れることができるまちを作り出すことができると考える。